

### <益田勝実の生涯と仕事>追跡と証言 : 年譜 と写真でたどる

岡田, 清子 / 天野, 紀代子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

97

(開始ページ / Start Page)

24

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2018-03-24

## 追跡と証言

——年譜と写真でたどる——

### 緒言

「特別企画…『火山列島の思想』から五十年」今、益田勝実を「」というタイトルを掲げました。「火山列島の思想」は、みなさんご存じの、益田先生のご著書で、刊行は、一九六八年です。半世紀経って、我々は、改めて益田先生のお仕事の意味を、もう一度真剣に考えていきたいと思うわけです。

最初は、天野先生、岡田清子さんの対談という形で、益田先生の人生や研究についてお話ししていただきます。天野先生は、益田先生の許で学部・大学院とずっと研究をしておられました。岡田清子さんは、益田先生の姪御さんでいらつしやって、研究はもちろん、それ以上に人生を共に歩まれた方だと、私は承知しております。

お二人のお話を伺って、その後、益田先生の、岩波市民セミナーでのお話をお聴きいただきます。益田先生の

天野 紀代子  
岡田 清子

講義を聴いたことがある方は、ひよっとしたら、もう少し数派かもしれません。益田先生の生の声を、と思ったのですが、もちろんあの世から来ていただくわけにはいかないので、いろいろ探しましたところ、一九九〇年、益田先生が説話文学をテーマにお話をされたテープが見つかりまして、それを編集いたしました。

それでは天野さん、岡田さん、よろしくお願いいたします。  
(坂本勝)

天野 益田先生の生涯を、便宜的に四期に分けました。「年譜」をご覧ください。「誕生から十代二十代」を一期とし、その後、「大学卒業後の十五年」を二期としました。三期としては、「法政大学専任での二十三年間」。四期目が、「定年退職後、そして

晩年」としました。一期ごとに、岡田さんからお話を伺う、という形式にしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

益田先生は、一九二三年、下関にお生まれになった。益田家というのは関ヶ原の戦いに敗れて、石見益田の地を捨ててこの下関に逃れてきた、という経緯があるらしく（アポロギアとテポリアと「梅原猛氏に」『文学』一九七五、一二）、そのことは、先生の生涯に関係があつただらうと思われまふ。

家の学問としては、漢文を教わるチャンスがあつた。そして中学生ぐらいになると、西洋哲学を専攻したい夢があつて、教会の牧師にギリシア語を習い始めると、いうような、文学少年だつたということです。中学校の昼食費二十銭を切り詰めて文庫本を買ひあさつていた、という話なども、あとで岡田さんから聞きます。

さきほど、岡田清子さんは益田先生の姪御さんだ、と紹介がありましたけれど、清子さんは、たつた五歳しか年下でない。妹のような存在で、生涯にわたつて、お兄ちゃまお兄ちゃま、と言つて、益田先生と共に生きてこられたので、私からみると、妹さんのように見えてしまいます。子供時代のことだつてご存じの存在なのだ、ということを紹介しておきます。

益田先生は、十八歳の時に、国民学校の助教をしながら、中等教員検定試験を目指す、と「年譜」の一九四一年のところを書きました。まだ十八歳ですよ、そんなときに、その生徒さんたちに、「僕は生涯、独学・独身を通すんだ」つて話したそうです。これは、後に聞いた話で、びっくりなんですけれど。証人が何人かいるんですね。

そして、学費の安い二松学舎へ。年間五十円と、書いてありました。二松学舎に入ったのは、「学費が続くうちに中等教員の国家試験に合格したい」という志があつたからなんだそうです。それで、兵役免除になるのかと思つたらそうではなく、翌年に学徒出陣令が出て、二松学舎では出陣壮行会というのが催されたそうです。

一九四三年、二十歳のところをご覧ください。万葉学の森本治吉教授に「大君の醜の御櫓」として疑わずに出征せよ」と言われ、「果たして防人歌はそう読むべきものだろうか？」という疑問から出発し、戦場までずっと『万葉集』の岩波文庫上下二冊本——白文の本だつて聞いています——を携行したということが、「万葉集を焼いた日」に書かれています。

『まんよう』という機関誌があります。益田先生は、婦人民主クラブで、万葉集講座を一九六七年から二十年もなさつていたんですけれど、そこで発表したものです。

そこに詳しく、戦地での話などが書かれています。そして、ずっと持ち歩いてきたこの『万葉集』を、敗戦の数日前、八月の十日か十一日に、もう生きては帰れないだらうと思つたので全部焼いた、ということが、この「万葉集を焼いた日」には書かれています。

翌年、復員するわけですが、その時に、父上の死亡、下関の実家も全部空襲で焼けてしまった、ということをお聞きされるわけです。ですから、故郷喪失の自己体験によつて、国境前線で逃亡して捕えられた防人の心境がわかり始めた、とそこには書かれています。

# まんよう

1969年1月 No. 3

万葉集講座の会 東京都渋谷区神宮前3-31-18  
婦人民主クラブ

小西 緑雨  
(婦人民主クラブ中央委員)

沖編 歴良主爵 平良市長の当選を祝して

南海の怒濤を昏れて冬満月

百万の沖縄のころ春を待つ



おかえし

小西 緑雨  
(婦人民主クラブ中央委員)

沖編 歴良主爵 平良市長の当選を祝して

南海の怒濤を昏れて冬満月

百万の沖縄のころ春を待つ

そのように、益田先生の学問というものは、戦前の、『万葉集』  
『古事記』の読みが戦争の翼賛につながったような、そういう  
ものに対する違和感から出発していて、とりわけ防人歌などは、  
自らの体験を重ね、身に沁みたる実感として、理解していた、と  
いうのが出発点だったと思います。

もうひとつ、この第一期で言いたいことは、「独学」という  
ことの前身です。益田先生は、大学に入る前に、既になかなか  
実証的な考証能力を身につけています。「年譜」の二十四歳と  
ところを見てください。ここで、投稿論文「播磨風土記は天平  
元年以後か」というのがあります。単なる地方の歴史好きの若

# まんよう

1969年1月 No. 3

3月	(隔月刊)	No. 4
5月	(隔月刊)	No. 5
7月	(隔月刊)	No. 6

万葉集講座の会 東京都渋谷区神宮前3-31-18  
婦人民主クラブ



おかえし

万葉集を焼いた日  
益田 勝実

万葉集を焼いた日(二)  
益田 勝実

背景に入れる



ただだん記憶がさだかでない。あれは、一九四五  
年八月の十日だろうか、いや、十一日だったかもしれな  
い。その日、投函文庫の『新刊万葉集』上・下と『松前  
宮城』を背景に始めた。そこで携行した符行手と  
その甲の身回りゆいまりを添えてたからだった。場  
所は、播磨ならはらつと東急いる。中園開園者か

ら広東省(編まてきたばかりの邦石)そこで、命守を交  
けて、津州省(編)もつて、別のところになるが、別方向  
にひとつ願っている。播磨防人の守備隊の教団とい  
くことになったのだ。た、教団とはいえず、これは死  
隊であるから、身代を認めて出かければならぬ。  
福原の省(編)に第十師(第四軍、中国紅軍)に取り囲ま  
れて播磨防人が占領された。たのは、そこが得ない  
無防の産地で、内地には良質の産地といえ、山果  
生産にも不可欠の産地であった。軍を動かすも、工業  
が、輸送の便益がたつた。い、もちろん、そのころは、  
もう、鉄道を使って大陸をはる運ばることも、播磨  
防にしても、孤立無援、預み出しはまかない状態だ  
た。第一、わたしたち(福中隊)が大陣隊(その要)と  
鉄道を運送して、南支派(津州)と中支派(津州)が手分  
かち運送、戦線を縮小するための、福安(福中隊)五百騎を  
ここまで苦心を重ねて運んできたのだから。その坪石出  
発の日まで、わたしたちは、『万葉集』を背景に背負っ  
て死ななう、と願った。

こまなわくしとに過ぎない。回頭をまたす頭の中  
でしてはじめて、府中(白ノイ)の三徳門(投函者事件)  
起きたからだった。わたしは、三十徳門の総門を通過さ

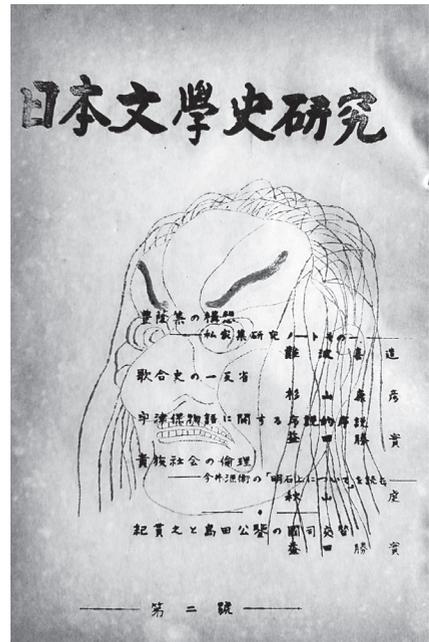
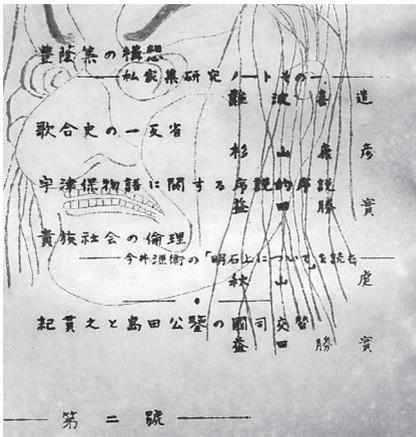
者ですよ。その投稿論文が、林屋辰三郎の目にとまって、専門書である『日本史研究』（第6号）に掲載された。それで、益田先生は「東京にいつて勉強したい」と強く思うようになった、そのきっかけになった論文です。『風土記』の成立年代を考証したという大変なものが、そういうことができた。

あるいはまた、大学に入つてすぐなんですけれど、萩谷朴の家の離れに下宿していた、知らない人は「ええ！」なんて思うようなことなんですけれど。その時に、「外記補任」という史料を見ていて、『土佐日記』で紀貫之と交替した新任の国司がしまだきみあき島田公鑑だとと発見するんですね。それは、その後、萩谷朴が編纂する『土佐日記』の本には必ず明記されています。そういう発見は、大学で学ぶ以前のことなんです。

大学二年生になると、日本文学史研究会というのを主催し、ガリ版刷りの機関誌『日本文学史研究』を出していきます。その第一号に、「紫式部日記の新展望」というのを発表します。これは、大学二年の時の池田龜鑑の単位レポートとして提出したっていうんですから、もう驚いてしまいますね（笑）。「紫式部日記の新展望」というのは、『紫式部日記』を読む人の必読論文として、私たちは読んだわけです。それは、人物考証を主とした研究なわけですが、先生の「独学」というものは、そういう実証的な考証から始まった。

『日本文学史研究』は、一九四九年から二十号まで出していきます。創刊号の巻頭言には、「我々は日本文学の研究が、今や自らの手で変革していかなければならない時期に達した」「飽く迄具体的に、新しい研究の出版を準備する為、共同研究を突

『日本文学史研究』第二号の表紙（目次付）



き進めよう」と謳われています。そういう志で、学年が一年上の難波喜造、杉山康彦、それから秋山虔などと共同での研究が始められます。

新しい時代の文学研究・古典研究というのが、彼らの目指すところだった。益田先生は、手業としては考証能力があつて、実証的なことができたんですけれど、志は、新しい時代の文学を、古典研究を、という二刀流で進んだ、ということを知っておきたいと思います。

卒業論文は、この『日本文学史研究』にどんな載せたもの、ほとんど全部を、これだけのことを書いたという証拠物件として、約三千枚重ねて出した。先生は、「統一はないんだ」と謙遜していらつしゃいましたが、「ただこれだけ考え事をした」というものを重ねて、久松潜一・池田龜鑑に提出した。「私の卒業論文」という文章（一九七一年）には、「先生方は困つただろう、迷惑しただろう」というようなことが書かれています。

岡田清子さんは、一九五〇年に、益田先生の後を追って、東大の国史に入られました。岡田さんの専攻は考古学で、この『日本文学史研究』の中にも「岡田清子」の名前が出てくるように、研究仲間・後輩として、このあたりからずっと先生の後を追ってこられた。『火山列島の思想』の最初の論文「黎明」の注の二番目に挙げられているのは、岡田清子の『横浜市史』からの引用です。縄文時代の集落の形態なんかが参照されているわけです。

子供時代のことも含めて、岡田さん、どうぞお話しください。

岡田 叔父の一生を四期に分けてお話を進めてくださって、感激しております。私にとつては叔父なんですけれども、私は益田勝実の妹だつていうふうにも考えられる、と言われて……、私、「お兄ちゃまお兄ちゃま」つて子供の時に言つて、それで亡くなるまでも亡くなつても、ずっと「お兄ちゃま」で通しましたんですが。一片も、妹という自覚はなかつたので、八十年も経つて私は妹だつて言われたのは、とってもショックでした。それが一番はじめの、天野先生に対する抗議かしら（笑）。

私がお兄ちゃまを発見したのは、昔の年で五つ、三歳ちよつとだつた時のことです。その頃は東京にいましたが、夏休み、一歳になる前にも、父方の出雲の家、それから母方の下関の家の時は、家族三人でご挨拶まわりをしてるんですね。その一回目の時のごときは全然記憶にございません。で、二回目の下関に行つたとき、初めてお兄ちゃまを発見するわけです。それはどういうことかと言いますと、お兄ちゃまが、割り箸をたくさん持つてきて、割り箸をくるくる巻いたり、並べたりなんかして、ポートを作つて、そのポートに柱を立てて、ちよつと紙で帆をかけて、ヨットを作つたんですね。で、「キヨコちゃんあそこに葉っぱがあるからとつてきて」つて言われて、ユキノシタを私がとつてきてみると、さつき浮かんでいた洗濯だらの中の中のポートがたらいの中を廻ってるんです。びっくりしちゃうつて。「あれっ」つて言つて急いで手を叩いたんですね。で、そのときに、「ポートが水の中で走りまわる、そんなものをお兄ちゃまは作つたんだ、お兄ちゃまは偉いんだなあ」と思つて。それが一番はじめのお兄ちゃまの発見でした。お兄ちゃまはそのときに私に向こ

うに行かせておいて、樟脳をボートにくつつけたんですね。樟脳を付けたからボートが回り始めたっていう、そういうことをやった人だったんです。

夏休みに私が来るというので、四月頃から、買ってもらってた雑誌の付録を全部とつといて、それで「キョコちゃんかきたらこれを一緒につくるう」と言つて、それは畳の上で作りましたけれども、たらいの水の中を走るボートっていうのは初めてで、本当に驚きました。私は長女で、上の人がいなかっただけです。それから、お兄ちゃまが本当にお兄ちゃまだったわけです。

それからしばらくして、私の家は東京から都落ちしまして、岡山県の高梁、信州の軽井沢、そしてまた東京に帰つてきて、小学校四年生の時に、はじめて下関の対岸の門司で生活をするようになります。門司の生活が五年くらいだったと思うんですけれども、そのころは、ふた月に一回くらいは、下関からお兄ちゃまかお祖母ちゃまがきて、下関のお魚を持ってきてくれたりなんかしてたんですけれども、こちらから行くこともありませんでした。

いつか行った時のことですが、「本を買つてあげるからついでおいで」と言われて、それで後ろをトコトコついていきまして。本屋さんに行くと、お兄ちゃまはすぐ本棚から一冊の本をとりだして、お金を払つて、歩きながら帰り道はずつとそれを読みながら帰つてきたわけです。帰つてきていよいよその小さなかわいらしい本を私にもらえるんだと思つて手をだしたら、「これはちよつとまづかった、清子ちゃんにはまだちよつと難しい」と言つて、とうとうその本はもらえませんでした。あ

とでしばらく経つてから、お兄ちゃまの本棚を見ますと、それは、芥川の『河童』だったと思います。そういうようなこともございました。

門司に行きました時に、お兄ちゃまは二冊の本をプレゼントしてくれました。それは、二つ下の弟にも、長女と長男にくれました。その一つは、『ピノチヨ』（ピノキオ）、もう一つは『フランダーズの犬』でした。なぜ『ピノチヨ』のことを申しあげるかといいますと、そののち叔父が下関中学に入りまして……あの人は徒党を組むのが上手なんです、徒党を組む人なんです……、それで何人かのグループのお友達に、まず一番最初に見せたのが、その『ピノチヨ』でした。一人が早速それを、絵のところはその絵をそのまま写す、文字のところも写して、自分で『ピノチヨ』の本を作っちゃったんです。

それから十何年か経つてですけれども、南多摩郡鶴川（現町田市）の安全寺、日本文学史研究会の雑誌を作るようになった安全寺で、そのお寺の子供達が隣の玉川学園に通っていましたが、その子供たちが持っていた玉川学園の『愛吟集』を見ましたら、『ピノチヨ』の歌が載つてまして、一緒に子供達と歌つた、その時に「清子ちゃんにあの時あげた『ピノチヨ』は僕の中学の時の友達がみんな一冊ずつ自分で書いて持ったんだよ」と言つて、そういうふうに教えられたわけです。私がもらった『ピノチヨ』は、ポスターカラーのライトブルーで真っ青に塗られて、それに墨で『ピノチヨ 西村アヤ（石田アヤ）』と書かれた、西村伊作さんが子供達に初めてピノチヨの話をイタリヤ語から訳しながら聞かせた、それを一番上の娘さんのアヤさん

が書いたんで、それが本になった、そういう本で、その本を、私の母が自分の一番下の弟である勝実に送った謂れのある本だったんです。戻ってきたら表紙はぼろぼろになって、それで叔父が新しくまた自分で表紙を付け、ポスターカラーで塗って、表題も付けた、その本を、小学四年生の時にくれたのでした。

その話のついでに。そのあと叔父は、「アンドロメダの天星雲までも」という表題を付けた話をB4の原稿用紙に、枙目は考えずに、どんどん書いたものを送ってきたり、書き足して持ってきてくれたりしてました。その一つは、「平家の一杯水」（壇ノ浦の戦いに纏わる話）というもの、もう一つは「厚狭の寝太郎さん」（所謂「三年寝太郎」の類話）というお話でした。

「平家の一杯水」っていうのは、和布刈神事ぬかりっていう、松本清張の書かれている推理小説（『時間の習俗』）にあります、門司側の和布刈神社の大晦日の晩のワカメを刈る神儀ですけれども、あれに関連した、早鞆の瀬戸……関門海峡の一番東の、一番狭まっているところ……、その海峡で一日に二回の干満の差があるときに、ちょうど水が湧き出してくるところがあって、それを本州から九州の方へやってきた平家の軍勢が、のどを潤すことができたっていう話とつながっております。後に叔父が「飢えたる戦士」という論文を書いていますが、それなんかは、この関門の田舎に残っている早鞆の瀬戸の潮の満ち引きが排出した湧き水のこと、その湧き水を平家の軍勢が飲んで、大いに意気を発揚したという、それを一生懸命、小さな字でたくさん書いて。三枚くらいはあると思うんですけども、その言葉が残っていないのが、いまでも残念に思います。

もう一つは、やっぱり下関の東の方の話なんですけれども、「厚狭の寝太郎さん」っていうお話がありまして、寝太郎の話は全国にたくさんございます。けれども、「厚狭の寝太郎さん」というのは、何にもしないでいつつも寝てばかりいるのでついにみんなから「寝太郎さん」と言われるようになったっていうのが全国的に拡がった昔話の一つの形態なんですけれども、「厚狭の寝太郎さん」は、一生懸命寝て、挙げ句の果てに乾田になった田んぼに水を引くことを考えついて、その水で水田の開削をしたわけですね。そういう単なる、あとで自分だけがお金持ちになった、成功したとかかっていう話の寝太郎ではなく、せんちゆうだ千町田と今も言われている地名が下関の東側の宇部市との間にあります、その寝太郎さんの話なども、その時に書いてくれています。

そうそう、小泉八雲の紹介で有名な「耳なし芳一」もありました。

**天野** 文学史研究会のころのお話はありませんか？

**岡田** 私が大学に入るようになりましたのは、叔父が大学に入ってみると、時枝先生の国語学科の方に、女子学生がおられて、その人と話していると、「なんだ、君は門司か。僕は下関だ」ということになって、「門司の女学校には『寒夕焼 ゴム風船を膨らます』という俳句をつくった人がいるんだ」って話したんですね。「どうしてその句を知っているの？ それ私の句よ」と言ったのが、竹内美智子さんだったんです。

「門司高女の上級生が大学にきて勉強しているから、君も受験しなさい」っていうふうに言ってくれて、それで東京に来るようになって。東京にきたら一番に、水道橋のお店で、ガリ版のヤスリを買ってくれて、そのヤスリを一枚もらって、それで文学史研究会の原紙を切り始めたんです（笑）。

**天野** ガリ版切り要員として駆り出されたんだと思いますけれども、岡田さん自身の論文も、『日本文学史研究』二十号の中にあります。

では、第二期を見ていきます。「大学卒業後の十五年」としましたけれど、その前の年、一九五一年に卒業し、就職先としては、東京都立神代高等学校の定時制の教諭となるわけです。その二年目……年譜で二十九歳というところ……、神代高校定時制の卒業生を中心メンバーとする「サークル・いしずえ」というのを主宰し、以後、読書学習・地域の生活向上・民俗採集・民謡採集、そういう社会文化活動に没頭します。

そういう活動の中には、「いしずえ」と染めぬいた旗のものとデモ行進したり、彼らと一緒に山登りをしたりすることもあった。こういう山登りが、先生にとっては論文の重要なモチーフとなって、たとえば、奥多摩の月夜見山で見た光景から、「廃王伝説」なんていう論文……『火山列島の思想』の中に収められています……、そういうものに実を結んだりする。六十年安保の頃ですけれども。

大きな闘争としては、調布の米軍飛行場の土地を一部奪還するという闘いに、企画段階から全力で参加して、一つの勝利を



横田基地反対闘争のデモ行進



ては大きなクレパスだった。」というふうな言い方です。この間は寄り道だった、だから大学の専任になった時はきつかった、などという言葉を、私たちも聞いたことがあります。『大きなクレパス』『空白の十五年』って本人がおっしゃるのはほんでもないことで、この間に出された成果は、なかなかすごいものがあるので、挙げていってみたいと思います。

一つ目は、一九五九年の『日本文学誌要』復刊二号に載せられた、『桐壺の院』です。『日本文学誌要』は、戦前では近藤忠義先生が重要な立役者ですけれど、戦後は、益田先生の功績が大変あったと思います。もちろん、この時はまだ非常勤で、論文も終わりの方に掲載されていますが、この復刊二号の「桐壺の院」が、『火山列島の思想』の中では「日知りの裔の物語」というタイトルに変えて収録される、『源氏物語』論としては画期的なものだと思います。のちに、先生自身が、「それまでの文学史的関心と考証的なこだわりの二面をどうやら融合できそうに思えてきた論だ」というふうに総括していらつしやいます（『私の源氏物語研究・源氏物語から学んだこと』『源氏物語講座』(1)勉誠社、一九九二年。第一期のところ、考証的な手つきと文学研究の二刀流という話をしましたけれど、この第二期では、その融合ということが成果をあげて発表されてきている。

次に、一九六〇年に『説話文学と絵巻』が上梓されます。その中に、「それまでは細かな考証ばかりやっていた、それを脱して文学の内部に反映するもので歴史を見ようとする方法を自分では持ち得た」という言葉があります。これらを読むと、この十五年間というのは、夜学の先生をしながら、社会活動もし

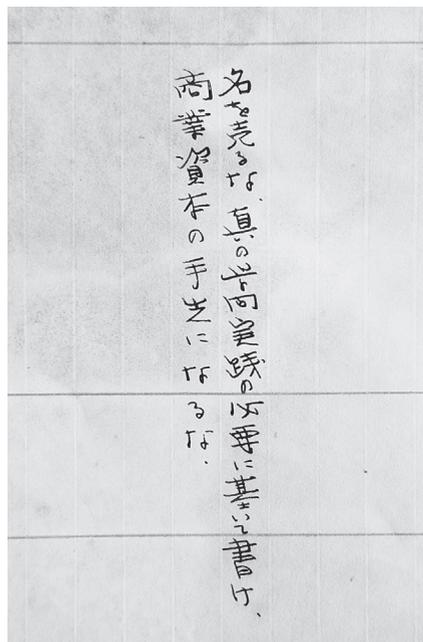
つつ、いくつもの研究論文が、手応えをもって書かれていった時期と重なるのです。

そして、『火山列島の思想』は、本として刊行されるのは一九六八年ですけれど、そこまでの五年間くらいに書かれた論文集です。後ほどテープを聞いていただく「偽悪の伝統」とか、「フダラク渡りの人々」、「心の極北」とか、「飢えたる戦士」、それらのほとんどは、こういう時期に書かれたものです。ですから、従来の国文学とは違う、画期的な論文が立て続けに出されていった、精神的な季節だったわけです。ご本人が「空白の十五年」と呼んだこの時期の最後に、『火山列島の思想』に収められた十一編の論文が実を結んでいった、ということを強調したいと思います。

学生たちには、研究論文も「作品」でなければならぬ、読ませる魅力がなくては……、とよく言っておられました。文献考証は手段であって、目的ではない、というのが、池田龜鑑教室から出発した益田先生の、執筆の核をなしていたのだと思います。

少し戻りますが、大学を卒業してまた十年も経っていないころに、先生は、自分の「論文目録」を作りました。膨大な量の論文を、「単行書」「論文」「(機関誌掲載)論文」「資料紹介」「書評その他」「読みもの」と分類して、……綺麗な字で書いていますけれども……、その扉に、どう書いてあったかというのをご紹介します。

「名を売るな 真の学問実践の必要に基いて書け、商業資本の手先になるな」と記されています。まだ三十代半ば、論文を



書き始めて十年というときに、自戒を込めて論文執筆の基本姿勢を、のように書いているのが、心に響きます。私たちは、ここのコピーを、みんなで分け持っていたりするんですけども。

こういう高い志で、研究活動の草創期というのが始まる。その一方で、非常勤講師で法政に来てくださったっていただけです。今思うと不思議というか、申し訳ないことには、ゼミと特講の二コマを、普通はそんなことしませんけれど、二日に分けて出校されていたことです。夜からは本務校で夜学教師の生活がある。昼間の大切な時間を二日も法政の学生のために割いていた。ゼミの日は、ゼミの学生と最後までつきあい、喫茶店

で話したり、大学近辺を探索したりしてくれた。高校でも大学でも全力で学生たちと向き合い、社会活動もしながら、論文を次々に発表していったというわけです。

この期は決して「空白の十五年」でも何でもないと思いますが、ご本人は、「そういう生活をして、法政大学に就職したときは、ちよつときつかった」というようなことをおっしゃっていたことがあります。

この期の猛烈な勉強ぶり、二足三足のわらじを履いて、寝る間も惜しんでの活躍は、岡田さんも巻き込まれていたのではないですか？

岡田 私は、その頃のこととはよく覚えていません。ガリ切りしていたことだけは覚えてはいますけれども（笑）。どうしてかっというと、私は国史学科を卒業しましたが、その頃は、ちょうど大場磐雄先生の『古代農村の復原』っていう本が出たりしまして、みんなその本を読み、一種の考古学ブームもあつたんですね。私も受験の時にはそれを目指してもしましたけれども、その頃には女子学生で考古学に入った人もいませんでしたし、私自身もその域に達していません。

次の年には、父が「やっぱり古代史をやってほしい」とって申しましたので、古代史を勉強することになりました。旧制の国史学科ですから三年ですけれども、三年間の勉強が終わってみますと、その間に考古学に実際に触れることが起こったんですね。叔父が勤めていました都立の神代高校の定時制の卒業生が、ある日教室に飛び込んできて、「何が起こったんだ？」って言

うと、「先生、江戸時代の便所が見つかったんだよ」「みんなどうしたらいいかって言ってるんだ」っていう話になりました、「それは便所じゃなくて、きつと古代の古い頃の住居址のその真ん中にあつた、ご飯を炊く炉の石組だろう」というふうに叔父は言いまして、さっそく私も付いて、小金井の武蔵野郷土館（現江戸東京たてももの園）に訪ねていきました。

そして、その出たところを調査するということになったわけですけれども、調査したところは、調布の町では一番西の外れにあたるところで、今私が住んでおります府中の車返というところからは、一番近い調布なんですけれども、そこのある構内、病院だったところを、今度立て替えをするということになって、土を掘り返したらそういう遺跡が出てきたわけですね。話を聞いて、武蔵野郷土館では、古代ではなくって縄文の専門家を派遣してくださいまして、実際に縄文の中期の住居址を、それにつながつてトレンチを入れていきましたので、奈良時代の住居址が二つ見つかるということが起こりました。私は今まで三年間、文書でしか古代というものを知らなかったんですけども、弥生の登呂まで行かなくても自分の今住んでいるこの多摩の地方にも、そういう古代の住居址があつたということが分かりまして、大学院になるような年齢になってから、古代史だけでなく考古学にも手を染めるようになりました。

私の場合は、その時には和島誠一先生のところをお願いにいて、その仲間に入れていただくことになりました。和島先生はそのころ岡山の月の輪古墳の、村中をあげての発掘調査に行つていらつしやいましたけれど、横浜の市史の仕事として、

考古学の発掘が始まりました。そこから考古学に手を染めるようになったんです。そのきっかけが、叔父の定時制高校の卒業生の人々の発見だった、ということでした。

私がそういうことになったのは、一つには、叔父の『説話文学と絵巻』が出版されて、それを読みましたら、今まで毎日ガリ切りしていた、それに出てきた研究と全然違うんです。今までは、文書の考証とか、そういうものだったんですけども、『説話文学と絵巻』の冒頭では、陽成天皇が自分の乳母の生んだ子供を平手打ちして殺したという、そういうことから始まりまして、叔父たちが研究していた、西片会館で毎月開かれる研究会でも、そんな話は全然なかつたのに、なんかすごく人間臭いというのかしら、そういうものを、叔父たちは研究していたんだ、ということが分かってきたんですね。

叔父たちの研究している古代のものっていうのは、なんかとつても人間臭いっていうか、もつと嫌な、そういう権力闘争っていうものである、というふうに考えられて。それから私は、叔父の書いているものを読むのが嫌になつてしまいました（笑）。それよりも空の下で鍬で土を掘っている方が良くなつちやつたんです（笑）。この二期の段階では、考古学の方に首を突つ込んだということにもなりました。

それよりも前ですけれども、私がそのころ誇りをもっていたのは……、正倉院の展覧が秋の虫干しの時にございますよね。北倉、中倉、南倉と開かれますけれども、その年に開かれないはずだった倉を、「岡田さんの研究で今年は開くようになったんですよ」って、青木和夫さんっていう助手の方から聞かされ

たことがあります。それで私は、あの憧れていた奈良の正倉院にお掃除に行かせてもらっただけでなくて、私自身が、その年計画されていなかったそのお倉を開けさせていたただくことになったんだ、ということ、初めて認識しました。

『出雲国風土記』の「天平五年二月三十日」という日付が怪しいということで、京都の藪田嘉一郎さんという古文書を研究してらっしゃる方が、『出雲国風土記』の正当性に対して文句をつけられた本が出たわけです。それに対して、すぐには、古史の方から何の反応も出なかったんですけども、私が「大日本古文书」の中の「正倉院古文书」を見ていく中で、「二月三十日」を発見して、ではお倉の中に入っている古文書も出して、実際に当たってみようということになった。そういう出来事も、この二期代には重なっていると思います。

天野 益田先生が文献考証から、より人間臭い文学の方へ軸足が移ったところ、岡田さんは考古学の方へ進んだ、というお話でした。「正倉院古文书」の日付を発見して、「出雲国風土記偽書説」に反論したのは有名な話ですが、それで、その年予定になかったお倉が開けられた、というのは初めて伺いました。

この、猛烈に忙しかった第二期には、例えば、小田急線に乗って新宿までの間に益田先生は原稿を書き進め、岡田さんは下書きを読まされて、新宿の喫茶店で清書して、先生は学校に行くんですけれど、岡田さんが出版社に届けに行く、ということは何度もした、といういきさつを聞いています。陰の支えもあって論文を完成させていた、そんな芸当を演じていたという、益

田先生は寝ていないんじゃないかと思われるような時期でした。『火山列島の思想』が出るのが一九六八年。その前に、先生は法政に就職します。さきほど、論文目録のノートを話題にしましたとおり、大学に就職する時には履歴書と論文業績なんかを提出するのですが、膨大な論文業績を巻き紙に書いて出した、っていう伝説があります(笑)。この場には、もう杉本圭三郎先生もいらっしゃらないので、伝聞でしかないんですけど。堀江拓充先生などは、「あとからよく聞いて知ってるよ」と言っていますけれど。そうした業績を持って、四十三歳の時、一年間は助教に留め置かれ、翌年、教授になられた。なぜ助教かというところ、「夜学教諭からいきなり大学の教授はないだろう」と、英文科の某教授が待ったをかけたという話は聞いています。伝聞で(笑)。

そして、『火山列島の思想』が出ます。この、日本の固有の神様、火の神は、噴火口の大きな穴をもったオオナムチである、それが日本固有の神だという説。昨今のように地震やら噴火やらが多いと、この説はもつと喧伝されてもいいんじゃないかとも思うんですけど。もちろん、火山噴火や地震が多いから、この『火山列島の思想』やそれに纏わる本が、いくつも復刊されているのも事実です。

しかも、先生は、日本固有の神は火山だ、火山神だ、というのを、あまり大きな声では言っていないんですね。そうじゃなくて、「日本固有の神というのは、祀る側が忌み籠もって神となってゆく」という、祀る側を重視する論であるわけです。「火山神だ、じゃあ富士山も論じなきゃ」という展開にはならなかつ

た。

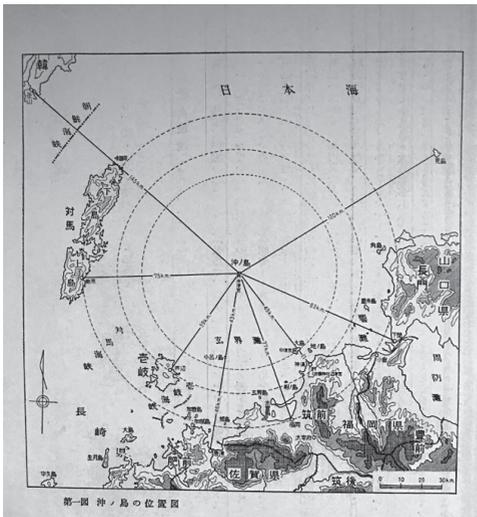
そして、『火山列島の思想』を追うように、『記紀歌謡』と『秘儀の島』が発刊されます。『記紀歌謡』は、叙情の世界というよりも、歌謡劇とか歌謡伝説とか、そういう方からのアプローチです。

そして『秘儀の島』が発刊されるのは、一九七六年。

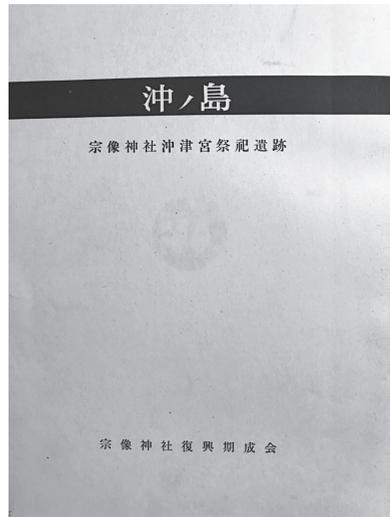
その五年ほど前に、大部の論文『秘儀の島上中下』が、三ヶ月にわたって雑誌『文学』に発表されました。この『秘儀の島』は、今、世界遺産に登録されて話題になっていますし、現在も藤原新也の写真によって展覧会が開催されていますから目にする事が多くなりました。それを、一九五四年の発掘調査報告書『沖ノ島』『続沖ノ島』、それと『宗像神社史』上下巻、そういうものを丹念に読み込んで、アマテラスとスサノオの誓いの神事、宗像三女神が生まれる神事が浮かび上がってくる、というように読んだのが、益田勝実の「秘儀の島」論です。

これは驚くべきことで、岩陰の発掘の、何号遺跡とかいうところから、アマテラスとスサノオの誓いの神事が立体的に浮かび上がってくる。夢物語じゃなく、それが、六世紀、古墳後期の時代の現物として、益田先生には見えてきたわけです。『古事記』成立以前にその神話はあったんだ、ということを立ててみせてくれた論文です。

『日本列島人の思想』という本が最近出まして（二〇一五年、青土社）、三浦佑之さんが書かれている「解題」に、「そもそも『考古学ジャーナル』をいつも読んでいる文学研究者はほとんどいないのではないか」という感嘆の文章がありますが、先ほどか



沖ノ島の地図



沖ノ島調査報告書

ら言っていますように、益田先生には岡田さんがそばにいるわけですから、『考古学ジャーナル』だろうが、沖ノ島の発掘調査書であろうが、身近にあったわけです。それを何年か睨んで舐めるように読んで、そこで、神話が出来る実態が見えてきた、というのが、この沖ノ島論だと思います。ファンタジーを語るのが益田神話学だ、などと言う人もいますけれども、科学者のような緻密な実証を経ての上で、ということだと思います。

『古事記』についても、日本人は不浄を忌む民族だと一般論では言わずに、岩波書店の「古典を読むシリーズ」の『古事記』冒頭、いきなり、「日本人は割り箸を使い捨てにする民族だ」というところから始めて、箸の発掘調査を追跡してからスサノオの大蛇退治に進む、という独特のやり方が、益田神話学なんだと思います。現在生きている我々の身体に残留している、「歴史の残留そのものとしての身体」。どうも、益田先生の身体には、そういうものが残留している、古代人のDNAが流れているらしく、目を見張られるようなことがいっぱいあります。そうした、魅力的な論文がいくつも書かれたのが、この二十三年間のことだと思います。

続けて、第四期に入ります。

定年退職後の最初の五年間くらいは、ご自分の仕事を総括するような講演や座談会をたくさんしていきます。

「年譜」の一九八九年～一九九一年のころ。ご自分の研究の総括をなさった一つとして、岩波セミナーの「日本説話文学の展開」がある。十二時間ほどの音源があるんですが、そのほん

の少し、二十分間を、後で聞いていただきます。説話文学というのが、結局、益田先生にとつては一番体質に合った領域だと思わざるを得ないような、魅力のある説話研究であり、語りです。神話も古代歌謡も、結局は、説話という切り口から入り込んでいくように思われ、説話研究が、先生のもっとも特色を發揮し得た分野ではなかったか、と私には思われます。

そうした総括の後、一九九五年から、先生は病気になるれ、その後十年余りはもっぱらベッドの上の生活になってしまいました。

その間の重要な事項としては、ちくま学芸文庫の『益田勝実の仕事』五冊を、刊行したことです。それも、益田先生が弱っていたからできた仕事なのであって、お元氣だったら、「ああ、そんなものは」って反対されたかも知れません。でも、かねてから「図書館にだけ並ぶような大部な著作集など作りたくない」とおっしゃっていましたから、一般読者にも向けた文庫本とすることで、納得されていたはずだと確信しています。

その五冊に収録したすべての論文は、岡田さんが時間をかけて読んで聞かせたということです。この時期の闘病生活では、すべて、耳から聞く読書だった。一日何時間もですよ。何年間もです。本当に気の遠くなるようなことですけれど、ちゃんと興味を持って集中力を持って聞いていらした。しかも、寄贈された本なんかも、岡田さんの朗読で、耳をすまして聞いていたそうなんです。

岡田 それは、研究書だけではなくって、下関中学の時の同級

生の、関門海峡の西に彦島という島があるんですね。そこは、源平の乱の時の平氏が最後に逃げ込んだ落人の集落で、七つの姓を持つ人たちが住んでいた、その一つに植田っていう一族があつて、その一人が叔父と同級生で、その植田さんの妹さんが、ずうっと書いていたものをまとめて、二冊の本になっています。お兄さんの方は海軍で、出撃していく時に、台湾にまだかからない日本列島を出たところで、船が沈没して亡くなっちゃったんです。自分がそういうときに原爆で殺されるべき人だったのに、身代わりになった人がいたために助かってこの世に残された、その運命っていうものをまた痛切に叔父は感じて。その後、妹さんが生活の中で様々な苦労も書いている、そういう本なんかも、とても関心をもつて聞いていました。

**天野** 時間配分が悪くって、持ち時間を超過してしまいました。ただ一つ、最後に、物をおっしゃれなくなっていた先生が発した言葉を、お聞かせ下さい。

**岡田** あれは、二〇〇五、六年の頃のことですが、夜中に目を覚まして、「口惜し」「口惜し」とだけ言って、あとは黙ってしまいました。それ以上は聞けなかったのが、今とても残念に思います。

**天野** そうして二〇一〇年、益田先生は八十六年の生涯を終えられました。後半は、駆け足になってしまいました。私どもの発言はここまでといたします。



(あまの きよこ・元本学教授)  
(おかだ きよこ)